

1 単元名「単位量あたりの大きさ」

2 対象

(1) 子どもの実態

- ・出身国： 中華人民共和国
- ・母語： 中国語
- ・滞日歴： 1年7か月
- ・就学年月： 1年7か月

(2) 子どもの現在の学習する力（レディネス）

〈 日本語の力 〉

① 聞く力・話す力

日常会話はほぼ身につけている。教師の指示も理解し活動にスムーズに入ることができている。多文化共生サポーターに質問する回数は減ってきている。しかし、「ゴトゴト」と「コトコト」などの擬音語・擬態語を区別して使い分けることはできず、また、「歯を食いしばる」や「目が回るほど忙しい」などの表現は理解することができないため、児童が持参している中和電子辞書で調べている。

② 読む力

熟語の漢字になると音読することが難しい。また、音読み・訓読みの使い分けが難しいため漢字にルビ打ちをすることで上手に音読できる。漢字は読めないが、漢字の意味から内容を理解し問題に取り組むこともある。学級文庫の「はだしのゲン」を好んで読み、その大意を読み取ろうとしている。しかし、4 学年以上の国語科の読解問題になると、問われている内容がわからず解答できなかつたり、誤答が多かつたりする。

③ 書く力

漢字は使用頻度の高い漢字の習得はできているが、2 年生の漢字もまだ習得できていない部分がある。ノートへ記入するスピードは速く、教師の発言と平行してノートに記入することができる。しかし、一日感想を書く場面では、単語を並べて作ったり、接続語がうまく選択できていなかつたりする。また、漢字を記入する時に中国の漢字を誤って書いていることもある。

〈 教科の知識・スキル 〉

学習への関心や意欲は非常に高く、積極的に取り組む姿勢が見られる。しかし、発表するときに、わかっているも周りの反応を気にして発言しないことがある。

足し算・引き算・かけ算・割り算などの計算は習得している。単位についても、習得しており、問題によって使い分けもできている。しかし、文章問題になると、問題の意味が理解できず活動できないことがあるが、担任や日本語指導加配教員、新学習システム担当に聞いて活動にすぐに入ろうとしている。

(3) 教材観

既習の乗法や除法の場面における「1 m の値段が 150 円のテープ」や「1 m の重さが 85 g の棒」などは、直接的な表現は用いていないが単位量あたりの大きさである。このような場面では、「1 あたりの量」が問題文で示されているため、単位量あたりの大きさの意識ははっきりしていない。本

単元では、異なった2つの量の割合で表される量について、その比べ方、表し方、つまり、「単位量あたり」について学習する。子どもの身近にある混み具合の場面や速さなどを素材にしているため、実際に操作してみる活動を取り入れることができ、どのように比べたらよいのかをイメージしやすい単元になっている。

(4) 外国人児童に対する指導方法

〈日本語における指導方法〉

児童に対する擬態語・擬音語、接続語などの説明や例文を挙げるなどの支援を、日本語指導加配教員が同室複数授業や別室個別指導により行っている。社会科と国語科は、必要に応じて別室個別指導を行っている。社会科では、人物カードを作り、学んだ内容を要約させている。国語科では、4年生の国語科の読解問題をしたり、接続語カードを用いて短文作りをしている。

また、同室複数授業では、発表がしやすい環境をつくるために先行授業や、発表する内容の確認を行って自信をつけさせるなどの指導・支援を行っている。

〈算数科における指導方法〉

算数科は児童が自立して勉強したいという気持ちも高いため、同室複数授業を行っている。児童が文章問題や教師の指示などでスムーズに活動に入れない時や質問がある時に、適宜指導・支援を行っている。本単元では、体験を通して理解したり、具体物を使って視覚的に理解できるようにする。

3 単元目標

単位量あたりの考えを用いて2つの量を比べたり、速さの意味や表し方を知り、速さに関する計算ができる。

4 評価規準

【関心・意欲・態度】 単位量あたりの考えのよさがわかり、これを用いて関連する2つの量の大小を比べようとする。

【数学的な考え方】 異種の2つの量の割合で表される量について、単位量あたりで考えることができる。

【表現・処理】 速さの意味とその表し方がわかり、速さについての計算ができる。

【知識・理解】 単位量あたりの考えを使った比べ方や表し方を理解している。

5 指導計画（全9時間）

第1次	単位量あたりの大きさ	…3時間
第2次	速さ	…4時間
第3次	ステップ「速さをはかろう」	…1時間
第4次	ジャンプ「トンネルを通過する電車」	…1時間（本時）

6 本時の学習（第4次 第1時）

(1) 目標

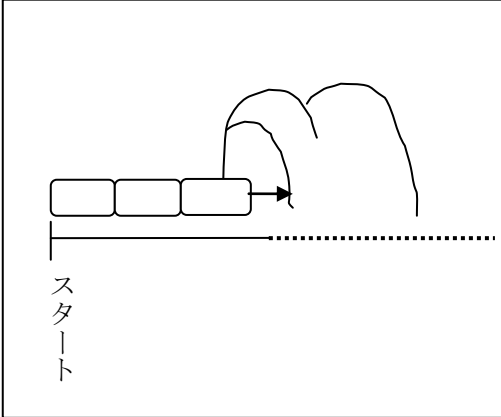
- 教科の目標
 - ・長さがあるものが移動した場合のかかった時間を求めることができる。
- 日本語の目標
 - ・「通過」という言葉を理解し、求める距離を日本語で説明することができる。

(2) 準備物

教師：半具体物（山・電車）

児童：必要に応じて日中電子辞書（児童が持参している。）

(3) 授業展開（同室複数授業）

	学習活動	主なやりとり	支援
つかむ	1 学習課題を確認する。	T1：教科書p73の問題を読みましょう。 T1：ノートに書きましょう。	○読めない漢字にはルビを書かせる。
	トンネルを通過するのにかかる時間を求めましょう。		
深める	2 半具体物を使って問題を理解する。	T2：電車のスタートとゴールはどこですか。(AUカード E-7) C：ここがスタート！ C：ここがゴール！	○スタートからゴールまでの道のりを数直線で結び、通過にかかった距離を視覚的に理解させる。
			
	3 通過にかかる距離を考える。	T2：なぜ、山から電車が出た時がゴールになりますか？(AUカード I-4) C：電車がトンネルから全て出た時が、通過するということだから。 C：電車が山の中に入っていたら、横に並んでいることと同じだから。	○「通過する」という言葉を理解し、それぞれが説明できるようにさせる。
	4 所要時間を求め	T1：電車の通過にかかった距離は何m	○数直線にトンネルの距離 40m

	る。 ノートに式・答えを 記入させる。	になりましたか。(AU カード D-2) C : トンネル 40m と電車 60m で 100m だと思います。	と電車の距離 60m を板書し、 電車が進んだ道のりを理解さ せる。 ○通過にかかった距離が理解で きない児童には、ノートに絵 を描かせて、段階を追って理 解させる。
ま と め る	5 所要時間を板書し 確認する。	T 1 : 電車が通過するのにかかった時間 を計算しましょう。 C : $(40+60) \div 20 = 5$ 答え 5 秒です	○再度、半具体物を使って式の 意味を確認させる。

【評価】

- ・ 長さがあるものが移動したことで、進んだ道のりに変化があることに気づき、速さと道のりから、時間をもとめることができたか。
- ・ 「通過」したことで、進んだ道のりに変化があったことを日本語で説明することができたか。

7 成果と課題

(1) 成果

- ・ 半具体物を用いて動かしながら展開したことによって、児童が順を追って理解できていた。
- ・ 担任、新学習システム、日本語指導教員の3人が机間巡視で、立式につまずいている児童に対してきめの細かい指導をしたため、子どもたちの理解が深まったと思われる。
- ・ 児童一人ひとりが問題解決に向かっていけるように、多くの発言を出させる授業になっていた。



(2) 課題

- ・ 外国人児童や在籍学級の子ども達が山を通過したことによって、距離に変化がしたことを明確にすることが必要であった。
- ・ 「道のり÷速さ=時間」を色分けして板書し、問題文の数字と関連づけて考えられるようにすると効果的であったと思われる。
- ・ 児童が発表に戸惑ったときに、発言例を提示することで、さらに多くの児童の発言量が増えたと考えられる。